

第67回 読売教育賞
1 国語教育部門
教育実践報告書

ブックカフェ（読書会）をつくる

～学校図書館と国語科授業の「二つの読書会」の挑戦とその課題～

お茶の水女子大学附属中学校
国語科 渡辺光輝・学校司書 奥山文子

I はじめに

本稿では、中学校で行われた「二つの読書会」の実践を取り上げる。一つは学校図書館で行う学校司書（奥山）によるもの、もう一つは国語科教諭（渡辺）が授業で行うものである。筆者である二人は、学校図書館では2015年に、国語科授業では2016年に本格的に読書会の取り組みをスタートさせた。

一冊の本をみんなで読み、語り合う読書会は、読書の喜びを共有し、周囲に読書の輪を広げていく。また一冊の本をなかだちとして、お互いの価値観に触れ、新たな一面を発見することができる。そんな読書会の力を、奥山、渡辺は自分が読書会に参加した経験から実感していた。しかし、いざ学校で取り組むとなると、膨大な準備や失敗の不安の前に尻込みしていたことも事実である。

この「二つの読書会」に取り組もうと決意したきっかけは、生徒の、読書に対する意識の差を目の当たりにしたことによる。本校の生徒は年数百冊も本を読む読書家の生徒がいる一方、全く読書に関心がない生徒もいる。「読書をしていても意味がない。高校受験の役には立たない」と公言する生徒と出会ったときは、心から悲しくなったとともに、国語教師としての責任を実感させられた。中学生という思春期の一番多感な時期を、読書の喜びを味わうことなく過ごしてしまうことがショックであり悔しかった。一方で、読書好きの生徒と、本があまり好きでない生徒がお互いに交流をすることで、読書の喜びを共有できるのではないかと考えた。こうして、先行する学校図書館での挑戦に背中を押された形で、国語科での読書会の取り組みをスタートさせた。

本稿では、学校図書館と国語科の授業で、初めて取り組んだ読書会の実践の詳細を記録していく。両者が読書会に取り組む際に、それぞれどのような準備をし、実践したかを明らかにすることをまず目的とする。そして、このように「二つの読書会」を並べて取り上げることで、両者の共通点や差異から、学校図書館と国語科授業の読書指導連携の方策を見いだしていきたい。なお、IIの学校図書館の実践は学校司書の奥山が、IIIの国語科授業の実践は国語科教諭の渡辺が執筆した。

II 学校図書館における読書会の実践

1 読書会をはじめた動機

奥山は、2015年度から図書委員会のイベントとしてブックカフェ（読書会）を実施してきた。はじめたきっかけは、夏休み前に全校生徒に配布したリーフレットに、『海の島』（アニカ・トール著 菱木晃子訳 新宿書房 2006）を載せたことだった。その後、読書好きな生徒の間でその本が読まれた。約300ページの厚い本にも関わらず1冊目を読んだ後、続編の3冊に手を伸ばす生徒が多く、すっかり愛読している様子が見られた。筆者は、以前からこの本について中学生と語り合いたいと考えていた。それぞれの生徒の、読後の感想にも手ごたえを感じたので、いっそ、この本を読んだ生徒が一堂に会し、感動を語り合ったら面白いのではないかと思い、放課後読書会を企画した。ちょうど、秋の読書週間を控えていた頃だったので、この読書週間のイベントの一つとして実施することとした。こ

の読書会の名称を「ブックカフェ」と名付けた。飲み物を提供するわけではないが、まるでカフェで過ごすように、くつろいで本についてワイワイ話してほしいと願ったからだ。

2 読書会の準備

(1) 読書会のねらいについて

ブックカフェのねらいは、読書の喜びを共有することである。本校は読書好きの生徒が一定数いる。本校の貸出状況から2割くらいの生徒が、読書を習慣にしている、読書が好きなのではないかと予想している。その生徒たちが、ブックカフェで読書の喜びを共有することで、さらに深い読書を経験できて、周囲に読書の輪が広がっていくのではないかと考えた。何事も楽しいことでないとは広がっていくのは難しい。

筆者は、図書室で接する生徒となるべく本について話すようにしている。生徒は思春期の難しい年代なので、嫌がられない程度でだが……。そうすると、「3冊の中でこの本が一番面白かった」「こういう本が他にないか」など気軽に会話ができるようになる。この会話を通じて本の好みを知ることになり、生徒の好みに合った本を薦めることができるようになる。調べ学習で資料を探す生徒に、求めている資料を提供することと、自分を育てる読書のための本を提供することは、どちらも重要な司書の責務であると考えている。

中学生が好む本は、軽いテーマのものが多くのが現状である。ブックカフェが広がれば、気軽に手に取られないような本でも、ブックカフェがあるから読んでみたい、という読書喚起になることを期待している。本にはただ、娯楽だけでない大きな力がある。内面を磨き、心の成長を促す本を一人でも多くの生徒へ手渡したいと考えている。

(2) 読書会の本の選定

これは、読書会のねらいと大きく関わってくることであり、筆者が生徒に手渡したい本を選んでいる。ブックカフェでは、テーマのはっきりとした本、読書の醍醐味を感じられる本、複数の人と感想を共有することで、さらに読みが深まるような本を選ぶことにしている。また、中学生と同じくらいの年齢の主人公が、精神的に大きく成長する姿を描いた本も取り上げている。ただ、第二回読書会の『舟を編む』の主人公は大人である。『舟を編む』は、その直前に2年生の定期試験の読書課題本だったので選んだ。第1回の参加者は1年生だけだったので、2年生の参加を促すために2年生全員が読んだ本にしたのである。また、『銀河鉄道の夜』は、読書会の常連の3年生のリクエストで課題本に選んだ。

3 読書会の進め方

【当日まで】

① 日程を決める

行事予定をよく調査し、放課後に生徒が参加しやすい日を選んでいる。会の時間は放課後40分間をあてている。ブックカフェが終わってから部活動に急いで向かう生徒もいる。中学生は塾や部活動でとても忙しいので、ブックカフェの時間を作り出すのも一苦労だ。

② 課題本の告知

2か月くらい前に、図書委員会だよりやポスター（あらすじ付き）で告知した。また、カウンターにも本を置いて宣伝した。

③ 参加を募る

第1回のブックカフェは、読者が10人くらいいたので読んだ生徒を誘ってみた。2回目以降は、図書館の常連に課題本をすすめて、「時間があったらブックカフェに参加してみませんか」とソフトに誘っている。2017年6月からは、図書館のイベントとして実施した「ライブラリービンゴ」に「ブックカフェに参加」の項目を加えたところ、参加のハードルが低くなったようで新規の参加者が増えた。

④ 課題本を参加者人数分用意する

当日は人数分の本が必要である。そのため公共図書館に複数冊所蔵があれば、団体貸出で借りている。2018年3月からは、国語科授業の読書会で使った課題本を、放課後ブックカフェで使うようにしたところ、課題本を用意する労力が減った。

⑤ 話し合うテーマを決めておく

司会は司書が担当する。事前に本を読みこんで話し合うテーマをいくつか選んでいる。

【当日】

① 会場設営と準備するもの

会場は図書館の一角で、閲覧機を一つ使っている。課題本を人数分、ミニホワイトボード、ボイスレコーダー、アンケート用紙、ぬいぐるみ（ぬいぐるみを持った人が発言する）を用意している。



読書会の様子

② 読書会の流れ

第1回『海の島』のブックカフェでは、まず、時代背景、あらすじ、登場人物を確認したあと、一番好きな登場人物、疑問に思った点、ステフィ（主人公）は変化（成長）したかについて話し合った。読書会は初めて体験した生徒ばかりだったが、読んで感じたことを、気負いなく生き生きと話してくれた。自分の体験と重ねて読んだ生徒もいた。筆者が思いもつかなかった観点で読んでいた生徒もいて、驚いた。ブックカフェ終了後のアンケートには、「他の人と同じところに共感して、でも違う意見もあって、すごく面白かった」「自分が感じたことを周りが受け入れてくれるところが、とても楽しかった」「読みが深まった、また読書会をやってみたい」とあり、全員の生徒がまたブックカフェに参加したいと記していた。「次回のブックカフェにはこの本を取り上げてほしい」と言う生徒もいて、読書の喜びを共有することに手ごたえを感じた。

4 読書会のその後

その後、渡辺教諭の後押しがあり、ブックカフェを継続して行うことになった。2015年度中は1か月おきに実施したが、本を読む期間が必要なので、1か月ごとに行うのは難しく、2016年度からは、4カ月に1回の間隔で1年に3回実施することにした。いままで開催したブックカフェの一覧は以下の表のとおりである。（表1）

表1 今までに開催したブックカフェ（※参考資料1に 読書会の課題本全てを掲載）

	時期	読んだ本	参加人数
1	2015年11月	『海の島』 アニカ・トール 菱木晃子訳 新宿書房 2006	7人
2	2016年1月	『舟を編む』 三浦しをん 光文社 2011	3人

3	2016年3月	『クラバート』オトフリート・プロイスラー 中村浩三訳 偕成社 1980	3人
4	2016年6月	『ギヴァー 記憶を注ぐ者』ロイス・ローリー 島津やよい訳 新評論 2010	7人
5	2016年11月	『鬼の橋』伊藤遊 福音館書店 1998	2人
6	2017年3月	『時をさまようタック』ナタリー・バビット 小野和子訳 評論社 1989	5人
7	2017年6月	『おじいちゃんの口笛』ウルフ・スタルク 菱木晃子訳 ほるぷ出版 1995	9人
8	2017年11月	『銀河鉄道の夜』宮沢賢治 新潮文庫 2012	8人
9	2018年3月	『影との戦い ゲド戦記1』アーシュラ・K. ルーグウィン 清水真砂子訳 岩波少年文庫 2009	4人
10	2018年7月	『西の魔女が死んだ』梨木香歩 新潮文庫 2001	9人

ブックカフェの後も、ブックカフェに参加した生徒が周囲に薦めて、『海の島』は多くの生徒に読まれた。もともと、この本を複本で所蔵していたこともあり、『海の島』が2015年度のベストリーダー（一番借りられた本）になったのは、嬉しい結果だった。

ブックカフェの後、毎回、簡単なアンケートを参加者に書いてもらっている。それによれば、参加者は、ブックカフェで自分とは異なる意見を聞くことで、読んだときには気づかなかった課題本の魅力を発見し、同じ本でも様々な読み方があることに気づいている。また、学年を超えた交流ができることも授業でのブックカフェと違う醍醐味であろう。

5 学校図書館が主催する読書会の課題

課題と感じていることは三点ある。一点目は、ブックカフェの課題本によっては参加者が少なくなるということだ。第5回の『鬼の橋』でブックカフェを実施したときは参加者は2人だった。この2人に、参加人数が少ないことについてどう思うか聞いたところ、「参加者が少なくなってもいいじゃない。このブックカフェは安心して本のことを話せる場だ。」と2人とも全く気にしていなかったのは嬉しかった。本の内容を深く読み取り、それぞれの意見を尊重して聞き、そうした読みかたもあったのかと触発されることで満足して帰る。人数にこだわらず、こうした読書会の本質を忘れないで継続していきたい。また、参加者が8人以上の場合は、2つのグループにするなどの工夫が必要だと感じている。4人くらいの人数の方が充実したブックカフェになるようだ。

二点目として、課題本を複数冊用意することが難しいという点である。公共図書館の団体貸出では複本を同時に何冊も借りることを想定していない（借りられない）ところが多い。また、仮に借りられたとしても、その本を、中学校が個人に貸し出すことはできないという規定があるため、生徒が家に持ち帰って読むことはできない。そのためブックカフェの前に多くの生徒に課題本を読んでもらうことができないのだ。

三点目として、学校行事の合間を縫って、日程を決めることに難しさを感じている。生徒も部活動との兼ね合いが難しいようだ。昼休みなら参加できるという生徒もいるが、時間が足りないと感じて放課後に実施している。課題本を読んでブックカフェに参加したいと言っていた生徒が、様々な用事ができてキャンセルすることが多々ある。

このブックカフェは、全校生徒や学級全体という単位の生徒を対象としていない。あくまでターゲットは読書好きな生徒である。しかし、継続してブックカフェを開催していく中で、読書を愛好する生徒の輪を広げていき、やがては学校全体に、読書を苦手とする生徒でも気軽に本について語ってみたいような文化を創っていきたいと願っている。

Ⅲ 国語科授業における読書会の実践

1 読書会をはじめた動機

国語科教諭である渡辺は、2016年度は1年生を担当した。この学年では入学当初より次のような読書活動を積み重ねてきた。

- 『読書生活デザインノート』（読書記録）を用いて読書の軌跡を記録する。
- 毎時間、授業の冒頭の10分をあてて自由読書の時間を設定。
- 長期休業中（夏・冬）の課題としてオススメ本のPOPを作り、それを掲示する。
- 長期休業明けの授業で「ビブリオバトル」（読書紹介）を行う。（2回）
- 学校司書が、授業と関連したブックトークを行う。

このような継続的な取り組みによって読書時間を確保するとともに、本とふれあう機会を意図的に作ってきた。読書会の取り組みは、このような経験を送ってきた学習者が、後期にその集大成として取り組む読書活動として設定した。

2 最初に取り組んだ読書会の授業の概要

（1）授業の趣旨と概要

- ①単元名 「お茶中ブックカフェ～一冊の本を一人で←→みんなで読む～」
- ②対象生徒 中学一年4クラス（119人）
- ③対象日時 2017年1月
- ④授業のねらいと趣旨

- ・ねらい：小説を味わう様々な方法を身につけ、それを自覚的に活用する。
- ・授業の趣旨：学校で用意した本の中から好きなものを選び、仲間を募って読書会を行う。読書会の前後には読むわざ（方略）を意識付けさせたり、振り返らせたりして、長編小説を読む力を養っていく。

小説を読む、しかも中長編のようなある程度の長さのある小説を読むためには、さまざまな読むわざ（方略）を活用することが必要となる。細部の読み取りから作品全体の理解へとつなげていくこと、情景描写などの様々なイメージを重ね合わせること、小説の構成と展開（ストーリー・プロット）を捉えながら読むこと、登場人物の性格や関係を押さえること、対比や類比などのつながりを意識しながら読むこと、作品で描かれている出来事と自分の体験を重ね合わせながら読むこと、伏線や暗示などの表現の工夫を捉えながら作品全体を理解することなどである。教科書教材の、数ページのごく短い小説の読解では、これらの方略はさほど意識する必要はないが、ある程度の長さのある作品を読み込む際には、読むわざを意図的に駆使していくことが必要となる。この読書会の授業では、中長編小説という、中学生にとって負荷の大きい文学作品に向かう際に、読むわざを意識的に活用して読み進めていくことをねらいとした。生徒にとってできるだけ楽しめる、かつ読み応えのある作品と出会わせ、読書会をゴールとして各自で読み進めていくなかで、他者の様々な読みに触れて作品の理解をさらに深め、読むわざ（方略）の引き出しを増やしていくことを目指す。

(2) 授業の計画

本単元では、課題本の読書会を行う前に、教科書教材を読書会の形式で交流する活動（お試し読書会）を前段に位置づけた。教科書教材の交流で、読書会のだいたいの流れをつかみ、それを課題本の読書会の交流に生かせるように配慮した。

以下が読書会の授業計画（表2）である。1～10は授業時数を示す。【課題本お試し読書期間】には、毎時間最初の10分間は課題本を自由に読む時間として設定した。この期間であれば、自分の好みに合わなかった場合は課題本を変更することができる。

表2 読書会授業計画

1	単元の概要と課題本について知る	【課題本お試し読書期間開始】
2	教科書教材「少年の日の思い出」を読む。 読書会で話したい疑問やテーマを書き出す。	↓
3・4	教科書教材「少年の日の思い出」ミニ読書会1・2	
5・6	課題本を読む	【課題本の決定】
(1週間)	ここで、入試期間のため一週間の自宅学習期間となる。 その間、各自本を読んでおく。	↓
7	読書会の準備（疑問点・テーマを考える）	
8・9	各グループで読書会を行う	
10	読書会の内容をまとめる	

(3) 課題本の選択とグループ分け

本が好きな生徒も苦手な生徒も、全ての生徒が一冊の本を読み切らないと、この活動は成立しない。そのため、学校司書と綿密に打ち合わせをして、一人一人の生徒を思い浮かべながら課題本を決定した。作品の難易度、登場人物（主人公は男女どちらかに偏らないように。同世代のもので）、ジャンル（リアル系、ファンタジー系、翻訳物）のバランス、低廉な文庫本であることなどが本選びの条件である。

読書会では、クラス内で同じ本を選んだ人同士でグループを作る形とした。選んだのが一人だけだった場合と、本が足りなくなった場合を除き、特に人数調整は行わない。その結果、1グループは2人～8人とかなりばらつきのあるものとなった。（表3）自分が読みたい本を選ぶ生徒、他の生徒と一緒に読む本を決める生徒など様々であったが、おおむね自分の読む力に見合った本を選んでいたのである。

表3 『課題本』と選んだ生徒数（本を用意した数）

M. エンデ『モモ』 ……………16人 (20)	D.キイス『アルジャーノンに花束を』 ……………8人 (5)
森絵都『カラフル』 ……………16人 (19)	梨木香歩『西の魔女が死んだ』 ……………7人 (20)
笹生陽子『ぼくらのサイターの夏』 ……………14人 (20)	サン＝テグジュペリ『星の王子さま』 ……………7人 (10)
重松清『エイジ』 ……………13人 (11)	L. サッカー『穴 HOLES』 ……………6人 (5)
湯本香樹実『夏の庭』 ……………10人 (20)	佐川光晴『おれのおばさん』 ……………3人 (5)
草野たき『ハッピーノート』 ……………9人 (10)	F. カフカ『変身』 ……………2人 (10)
三田誠広『いちご同盟』 ……………8人 (15)	計 119人 (170)

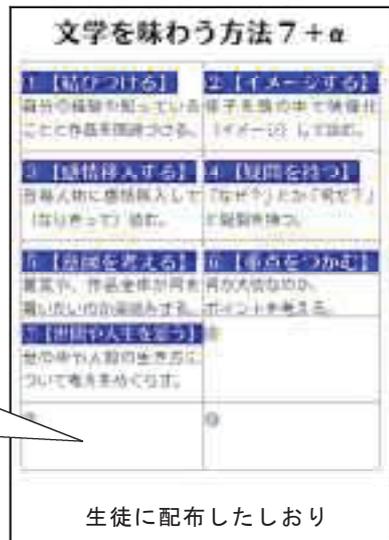
(4) 読書会の授業の工夫

①「本を読むわざ」を引き出す「文学を味わう方法7+α」

読書する際に、つねに「本を読むわざ」を意識付けさせるために、右の「文学を味わう方法7+α」^{*1}を生徒に示した。この「+α」の意図は、残りの三つのわざは生徒が自分で見つけていって欲しいということである。

これを印刷し、しおりにした。生徒はつねにこの方略を意識して課題本を読み進めていくようにさせた。

読書会の授業が終了したあとで、この7つ以外に「+α」としてどのような方略を活用したか、自由記述で書かせたところ、生徒は次のような方略を指摘した。表4は、類似した内容ごとに項目をまとめて集計したものである。



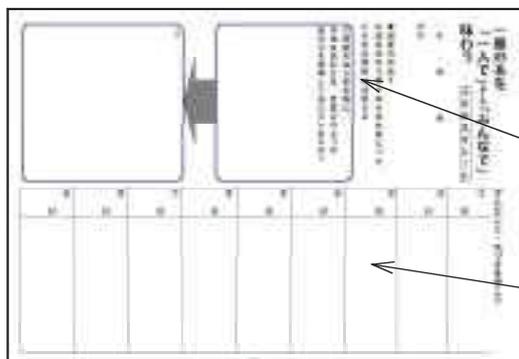
残りの三つの「本を読むわざ」は自分で見つけ、記入する。

表4 生徒が「本を読むわざ」として書き足したもの（数字は記述した生徒数）

予想する	24	分からない言葉、気になる言葉に着目する	11
登場人物の関係／性格を理解する	20	伏線を考える	7
読み返す	19	変化に着目する	6
題名から考える	18	自分の考えを持って読む	6
視点を変えて読む	14	他の人と共有する	5

「予想する」「登場人物について確認しながら読む」「読み返す」「題名から考える」などは多くの生徒が指摘をした方略である。「登場人物の関係や性格を理解する」という方略は、普段の教科書教材の短編小説でも行っているものであり、目新しさは感じない。一方、「予想する」「読み返す」などは中長編小説ではとくに必要な方略であり、多くの生徒にとって強く意識されたものであったことが推察される。

②「今日のはまり」から「本を読むわざ」を振り返る1枚ポートフォリオ(B4)



本を読むときに意識した読み方、味わい方を「一枚ポートフォリオ」^{*2}の形で記述していき、捉えられるようにした。

上段の大きな枠は、小説を読むときにどのような読み方をしているか、読む方略を授業前と授業後で記述するスペースである。

下段は毎時間の振り返りを書く枠である。※

*1 この七つはエリン・オリバー・キーン(2014)『理解するってどういうこと』(新曜社)、吉田新一郎(2010)『「読む力」はこうしてつける』(新評論)でとりあげられている「優れた読み手が使っている方法」を下敷きにし、それと興水実(1975)『興水実独立講座/国語科教育学大系 第10巻 国語科文学指導・読書指導』(明治図書)の「文学鑑賞スキル」を参考にして筆者が作成したものである。

*2 堀哲夫(2013)『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価OPPA』東洋館出版社

ここには、本を読んだときに、どこに一番没頭したかという「今日のはまり」を言葉にするようにさせた。「今日のはまり」を記述させたのは、自分が作品に深く惹きつけられたとき、どのようなアプローチ（読みの方略）によって達成することができたか振り返るためである。「はまり」から逆算して、読みの方略の存在に気づかせるのがねらいである、

※『西の魔女が死んだ』を読んだ生徒の「今日のふりかえり」 **太字**が読む方略に関わる記述。

1日目 感情を入れたり深読みできそうなところを探しながら、気持ちを意識して読んだ。	2日目 書いていないことを悟って読み進めていくのが難しかった。離れているところにこたえがあると、探すのも大変だった。	3日目 名前や呼び名に気を取られずに、この人はこの人なのでは？と考えてみる。なぜこうしたのか、行ったのか、と。「なぜ」で考えしてみる。	4日目 「西の魔女が死んだ」母がおばあちゃん家から家に帰ってしまふ時の寂しさと、自分の時と照らし合わせて、寂しさを本と分かち合っていた！ ↓入院していた時の。	5日目 おばあちゃんの話の聞いていると、まいが、「それで、それで？」というのですが、私も思わず心の中で、それで、それで？と言ってしまった。物語でまいになった気分でした。（ずっと）
--	---	--	---	--

③付箋に疑問やテーマを書き出し、学年全体で共有する。

本を読んでいく中で読書会で話し合いたいことを付箋に書き出させた。

同じ本を選んだ全クラスの生徒の付箋をボードに貼りだして参照、共有できるようにした。

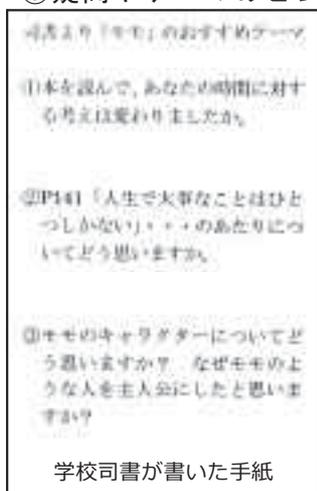


付箋に書かれたテーマとホワイトボード

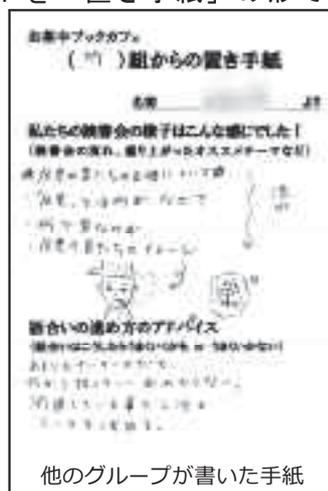
④ホワイトボードで交流を可視化する

読書会の話し合いでは、まず付箋に書き出した疑問点について交流するところからスタートした。話し合いの内容はホワイトボードを使って整理し、会話が空回りしないようにさせた。

⑤疑問やテーマのヒントを「置き手紙」の形で示す



学校司書が書いた手紙



他のグループが書いた手紙

「置き手紙」には司書がおすすすめする話し合いのテーマと、他のクラスが取り組んだ読書会の様子が書かれた手紙が同封されている。この手紙が各グループのテーブルに置かれる。（話し合いの後半に入るまで「置き手紙」は見えてはいけないというのがルール）

置き手紙を見ることで、読書会のヒ

ントとなるように、また他のクラスへ手紙を書くことで、自分たちの話し合いを客観的に振り返ることができるようにした。

(5) 読書会の事後指導

読書会を終えた後は、学校司書がブックカフェの課題本につなげて、次におすすめする本を紹介した。

また、読書会で自分が選んだ本のオビを制作し、それを図書室内に展示した。



生徒が作成したオビ

(6) 読書会を終えて、アンケートの分析から

アンケートは、【読書会は楽しかった】・【読書会は本を読む力を付けた】・【課題本は自分に合っていた】について、(1 よくあてはまる・2 ややあてはまる・3 あまりあてはまらない・4 まったくあてはまらない)の四つの選択肢で質問した。(図1) いずれの項目も肯定値は高く、このデータを見る限り、読書会は多くの生徒にとっておおむね楽しく力を付けると自覚された取り組みであったことが示唆される。

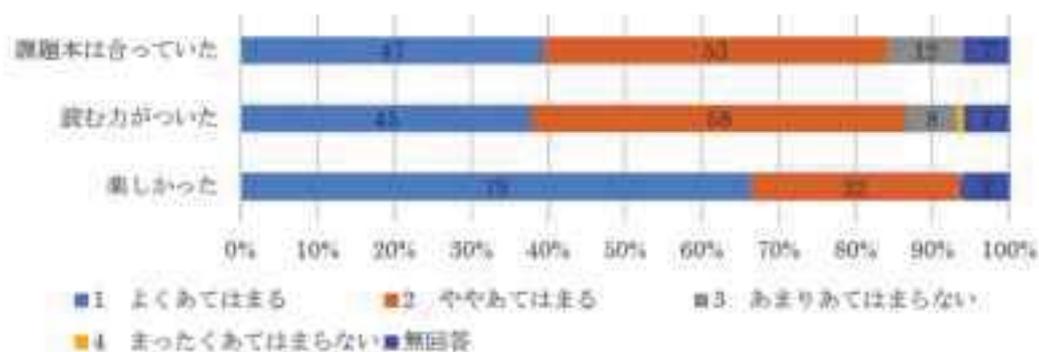


図1 授業後に行ったアンケート結果 (人数)

次のアンケート項目は【読書会の授業の良さとして感じられるところは】という質問である。回答者は上位二つまでの項目を選択する。次のような結果になった。(図2)

生徒たちは読書会について、ゆったりと本に親しむ時間、本の感想を交流でき、多様な角度で作品を鑑賞できるところが「良さ」とであると認識していることが分かった。

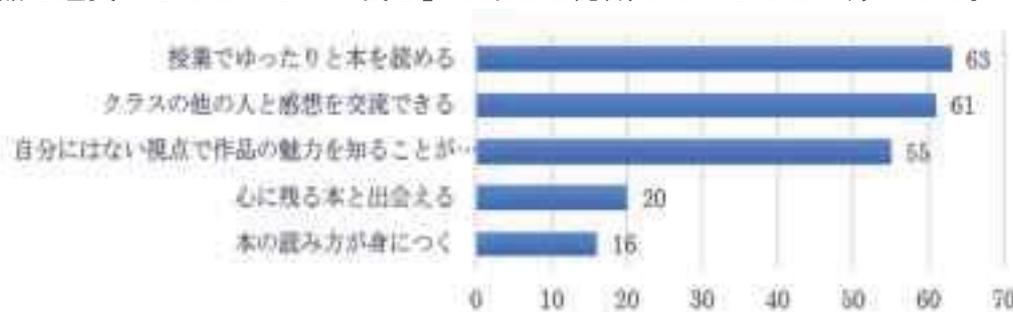


図2 読書会の良さは？ (人数)

(7) 初めて取り組んだ読書会の反省と授業計画の改善

初めての読書会の授業を終え、反省点も見えてきた。そこで、2年生の読書会の授業では以下のように授業計画を立て直した。

課題本〔できるだけ多くの種類を→→→数を絞って厳選〕

<p>【課題】 たくさん課題本を用意した(13種類)のは良かったが、グループが分散した。また、話し合いの質もまちまちとなった。</p>	➔	<p>【改善策】 今回好評だった四つの本を残し、新たに4冊を加え、合計8タイトルに絞った。難易度やジャンルに偏りがないように配慮した。 継続：『モモ』『西の魔女が死んだ』『エイジ』『穴 HOLES』 新規追加：『影との戦い ゲド戦記(1)』『鬼の橋』『宇宙のみなしご』『あと少し、もう少し』</p>
--	---	--

グループ編成〔人数はグループごとに異なる→→→3～4名に調整〕

<p>【課題】 グループ分けを自由にさせたが、2人～8人とかなりばらつきがあった。多い人数のグループは話にあまり参加できない生徒もいた。</p>	➔	<p>【改善策】 事前に第一希望～第三希望まで希望を取り、1グループが3～4名になるように教師がグループの人数調整をした。 読む力、ディスカッション力、人間関係、男女比などを考慮して、各グループのバランスを整えたグループ編成にした。</p>
---	---	---

読書会の話題・テーマ〔浅い疑問で深まらない→→→共通テーマと自由テーマを設定〕

<p>【課題】 学年の生徒から出た疑問を全て一覧にして提示した。その中から選んだ話題について交流していった。 しかし、中には、些細な疑問に引っかかり、なかなか深いテーマの話し合いへと進まないグループもあった。</p>	➔	<p>【改善策】 読書会の交流を効率的に行うために、事前に作品の設定、登場人物についての整理させておく。 その上で、読書会では、段階を踏んで、深い話し合いに進めることができるよう、全グループ共通テーマと各自が考えた疑問の二つについて話し合うことにした。 第一回の共通テーマ 好きな場面・好きな(気になる)登場人物・印象に残った言葉 第二回の共通テーマ この作品の特徴は？ この作品の面白さは？ この作品が伝えたいことは？</p>
---	---	---

読書会の話し合いの進行〔発言が偏る→→→司会・話し合いの進行のヒントカードの作成〕

<p>【課題】 とくにやり方は提示せずに話し合いをさせたが、発言が一部に偏ったり、滞ったりすることがあった。</p>	➔	<p>【改善策】 司会者へのヒント(司会の切り札)と、話し合いの切り口(面白く読むワザ)をカード(※参考資料3に掲載)にして各グループに配布し、ヒントとした。</p>
---	---	--



「司会の切り札」カード (一部)

「面白く読むワザ」カード (一部)

以上のような反省を踏まえ、2年生での読書会の取り組みを行った。現在、3年生の授業に向けて、さらに改善をしていく予定である。

Ⅲ 学校図書館と国語科授業の読書会を実践して見えてきたこと

最後に、これまで述べてきた学校図書館と国語科授業の読書会の実践を比較し（表5）、共通点と相違点を考察して読書指導における両者の連携の可能性を考えていきたい。

表5 学校図書館と国語科授業の読書会の比較

	学校図書館の読書会	国語科授業の読書会
目的	読書の喜びを共有し、読書の輪を広げることがねらい。	読むことの学習として行う。 小説を味わう様々な方法を身につけ、それを自覚的に活用することが目標。
参加者	主に読書が好きな生徒（希望者）がターゲット。 自発的に集まってきた少数のメンバーで。	授業に参加する全生徒が対象。 読書傾向や読む力もさまざまである。
課題本の選択	「学校司書が生徒に手渡したい本」を標準として課題本を一冊取り上げる。 テーマのはっきりした、読書の醍醐味を感じられる本。複数の人と感想を共有することでさらに読みが深まるような本。	生徒全員の興味関心、読む力にあわせて、幅広く本を選定するように配慮。 複数のジャンル、登場人物などの作品を提示し、その中から生徒に選択させる。
読書会までの指導	二ヶ月前に予告。 参加者は読書会当日までに各自で読んでおく。読んでくること以外の条件はなし。	一ヶ月前に課題本を決定。 授業時間の中に読む時間を設定している。 文学を味わう方略を示し、振り返らせる。
読書会での指導	学校司書の問いかけや促しによるファシリテーションによる進行が中心。	生徒自身で問いを見つけたり、テーマを選択したりして自分たちで交流を進める。

1 学校図書館と国語科授業における読書会の差異

学校図書館と国語科授業での最大の違いは参加者である。国語科授業では全員が読書会に参加するが、学校図書館では興味を持った希望者が参加する。そこから、学校図書館では、ある程度学校司書が思い切って課題本を選定することができるし、国語科授業では参加する生徒の多様性に対応した課題本を用意することとなる。

もう一つの違いは両者が目的とするところである。学校図書館では「読書の喜び」を共有することを重視するが、国語科授業では「読むこと」の指導の一環として実施される。そのため、国語科授業では読書会を通して、読み方（方略）を意識させたり、読む観点やテーマを学習者が持つことができるようにしたり、事後のふり返りを促したりといった指導・支援が行われる。読書会の話し合い当日だけでなく、読書会に至るプロセスへの介入と指導が行われるのが国語科授業における読書会の最大の特徴であり、役割だ。

2 学校図書館と国語科授業における読書会の共通点と連携の可能性

学校図書館と国語科授業では、目的や参加者などに違いがあるものの、両者には共通点もみられる。その一つは課題本の選択である。国語科授業では幅広い読者層を対象として課題本を選択することになるが、読むことの指導ができれば、どんな本でもよいというものではない。学校図書館、国語科授業とも、読書会で普段の読書生活では手に取りにくい作品に触れ、それを通して自己の価値観を深め、成長させるという目的には共通するものがある。学校図書館で選んだ本を国語科授業でも取り上げるなどの連携が効果的だ。

読書会での対話についても同様である。単なる読解内容の確認ではなく、より深い作品テーマへの追究や、作品が読者に投げかけるメッセージについての対話がなされる読書会の交流は、学校図書館も国語科授業でも理想とするものである。ただし、読む力や読書傾向がさまざまである国語科授業においては、このような充実した対話を行うことは容易ではない。国語科の授業では、司会や読み方の切り口を示して、各グループの交流が豊かなものとなるように支援した。一方、学校図書館で行う読書会の場合は、司書がファシリテーターとなり、読書会の豊かな交流が成立していた。学校図書館が行っている読書会に参加した生徒たちが、読書会の魅力をたっぷり味わった上で国語科授業で行う読書会に臨むような流れとなれば、その生徒たちは授業においても、他の生徒をリードする存在となり、相乗効果が期待できるだろう。

学校図書館からみた国語科授業の読書会の効果は、普段本を手にとらない生徒が、もれなく、一冊の本を読み切る経験をさせることができたということだ。授業は良い意味での強制力がある。生徒が自分からは手を伸ばさないような本に積極的に触れていく機会として、国語科授業での読書会を位置づけることができる。

国語科からみた学校図書館の読書会の効果は、読書好きな生徒が、めいっぱい好きな本について語り合う機会を提供しているということである。このような文化的な活動は、中学校ではなかなか取り組むことがない貴重な場である。今後は学校図書館でも本好きな生徒を対象とするだけでなく、読書が苦手な生徒に対しても気軽に参加できる読書会を開き、読書を通して語り合うことがさらに身近なものとなっていくことを期待したい。

学校図書館、国語科授業とも、読書によって内面の成長を促し、自立した読書人を育てるという理念には共通するものがある。両者の役割を意識するとともに、相互に連携して、相乗的に効果が上げられるように協働していきたい。

Ⅳ おわりに

読書会の取り組みで最も苦勞するのは、なんと言っても課題本の選定だ。「この本を是非中学生に読んで欲しい」「きっとこの本なら〇〇くんは興味を持ってくれるだろう」などと、およそ4ヶ月位前から奥山と渡辺で本について相談し合う。最終的に決まったのは8冊でも、そのために探す本は何倍にも及ぶ。しかし、そんな苦勞が吹き飛ぶのは、読書会で生き生きと話し合う生徒の姿を見ることが出来るからだ。中学生にとって多少ハードルが高いと感じられる本でも、グループの対話の力で少しずつ霧が晴れるように理解が開け、深まっていく。そんなとき「そういうことだったのか！」と、生徒は思わず声を上げる。読書が苦手な子が読書会の話し合いに嬉々として取り組んでいる。このような姿はどのクラスでも目にすることができた。あらためて、本の力、読書会の力を実感している。

さらに嬉しかったことがある。読書会で名作（『モモ』『君たちはどう生きるか』）を取り上げたとき、早速ある生徒が「家でもこの本の読書会をして盛り上がりました」と報告してくれたのだ。読書会が学校の中だけでなく、家庭にも、しかも親と子の世代を超えて広がりつつある。これからも「安心して本のことを話せる場」である読書会を、学校図書館に、そして国語科の授業の中にしっかりと根付かせていきたい。

資料1 読書会の課題本リスト

学校図書館で取り上げた課題本（2015年～2018年）

- 第1回 『海の島』 アニカ・トール 菱木晃子訳 新宿書房 2006
- 第2回 『舟を編む』 三浦しをん 光文社 2011
- 第3回 『クラブアート』 オトフリート・プロイスラー 中村浩三訳 偕成社 1980
- 第4回 『ギヴァー 記憶を注ぐ者』 ロイス・ローリー 島津やよい訳 新評論 2010
- 第5回 『鬼の橋』 伊藤遊 福音館書店 1998
- 第6回 『時をさまようタック』 ナタリー・バビット 小野和子訳 評論社 1989
- 第7回 『おじいちゃんの口笛』 ウルフ・スタルク 菱木晃子訳 ほるぷ出版 1995
- 第8回 『銀河鉄道の夜』 宮沢賢治 新潮文庫 2012
- 第9回 『影との戦い ゲド戦記（1）』 アーシュラ・K. ル＝グウィン 清水真砂子訳
岩波少年文庫 2009
- 第10回 『西の魔女が死んだ』 梨木香歩 新潮文庫 2001

国語科授業で取り上げた課題本（中1→中2→中3）

※連続して取り上げている本もあります。

1年「ブックカフェI」（2016年に実施）計13タイトル

- 『穴 HOLES』 ルイス・サッカー 幸田敦子訳 講談社文庫 2006
- 『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス 小尾美佐訳 早川文庫 2015
- 『いちご同盟』 三田誠広 集英社文庫 1991
- 『エイジ』 重松清 新潮文庫 2004
- 『おれのおばさん』 佐川光晴 集英社文庫 2013
- 『カラフル』 森絵都 文春文庫 2007
- 『夏の庭』 湯本香樹実 新潮文庫 1994
- 『西の魔女が死んだ』 梨木香歩 新潮文庫 2001
- 『ハッピーノート』 草野たき 福音館文庫 2012
- 『変身』 カフカ 高橋義孝訳 新潮文庫 1987
- 『ぼくらのサイターの夏』 笹生陽子 講談社文庫 2005
- 『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ 池澤夏樹訳 集英社文庫 2005
- 『モモ』 ミヒャエル・エンデ 大島かおり訳 岩波少年文庫 2005

2年「ブックカフェⅡ」（2017年に実施）計8タイトル

- 『あと少し、もう少し』瀬尾まいこ 新潮文庫 2015
- 『穴 HOLES』ルイス・サッカー 幸田敦子訳 講談社文庫 2006
- 『宇宙のみなしご』森絵都 角川文庫 2010
- 『エイジ』重松清 新潮文庫 2004
- 『鬼の橋』伊藤遊 福音館文庫 2012
- 『影との戦い ゲド戦記（1）』アーシュラ・K. ル＝グウィン 清水真砂子訳
岩波少年文庫 2009
- 『西の魔女が死んだ』梨木香歩 新潮文庫 2001
- 『モモ』ミヒヤエル・エンデ 大島かおり訳 岩波少年文庫 1973

3年「ブックカフェⅢ」（2018年に実施予定）計9タイトル

- 『あと少し、もう少し』瀬尾まいこ 新潮文庫 2015
- 『穴 HOLES』ルイス・サッカー 幸田敦子訳 講談社文庫 2006
- 『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』米原万里 角川文庫 2004
- 『エイジ』重松清 新潮文庫 2004
- 『怪物はささやく』シヴォーン・ダウト原案 パトリック・ネス 池田真紀子訳
創元推理文庫 2017
- 『影との戦い ゲド戦記（1）』アーシュラ・K. ル＝グウィン 清水真砂子訳
岩波少年文庫 2009
- 『君たちはどう生きるか』吉野源三郎 岩波文庫 1982
- 『村田エフェンディ滞土録』梨木香歩 角川文庫 2007
- 『羊と鋼の森』宮下奈都 文春文庫 2018